

救急画像ティーチングファイル

Daniel B. Nissman ● 編
船曳知弘 ● 監訳

〔評者〕佐藤朝之(市立札幌病院救命救急センター部長)

知らなければならないけれども、「知らなければならないこと自体を知らない」(だから、知ろうとする行動自体が起こらずに、いつまでたっても知らないまま)ということがある。

適切な term さえわかれば自由に検索ができて、さまざまな情報を獲得可能な現在ではあるけれども、検索されない情報は触れることができない。

日々の臨床で患者さんに向き合いながら、自分の知らないこと、できないことに向き合っては学んでいく中で医師として経験を積むわけだけれど、経験には個人差があるし、「知らなければならないことを知らない問題」は常に付きまとう。

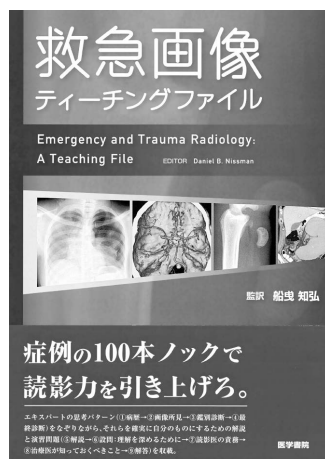
先輩の医師はそれを知ってか知らずか、時折若い医師に自分の経験を語ってくれる。エビデンスの世の中ではあるが、一例の経験が教えてくれることは少なくない。「語り継がれるべき経験」は蓄積されて、Teaching File になる。そこには(全てではないにせよ)自分がまだ知らないことへの学びのきっかけや、経験のばらつきを埋めてくれる材料が詰まっている。

救急という単語が醸す意味にはさまざまなあるけれど、診療科に関係なく、「そのときその場にいる

者が適切に判断を下して時間の制約のある中で治療的介入をしていかなければならない」という差し迫ったものを多くの人は感じとるのではないだろうか。治療的介入は必ずしも急ぐものばかりではないけれど、「急ぐか、急がないかの判断は、急ぐ」のである。判断を下すときに、画像診断の力は欠くことができない。

本書は画像診断の能力を高めることに目的があるものではない。ある程度画像が読めるくらいの経験を積んだ上で、ページに挙げられている key film の意味を味わうことができるようなレベルでの使用が最も好ましい。

私たちは、画像をオーダーするときも読むときも、病歴や症状、外傷の時は受傷機転から、「ここにこういう所見があるはずだ」という正しい先入観を持ってこれに臨むが、本書では、あえて病歴や受傷機転は最小限にとどめられている。一方で、救急外来では所見を取ってある程度鑑別を挙げたら、適切な専門医とともに診療に臨むけれども、本書はその所見を取った先の解説が手厚くなされている。放射線科の視点からの画像の読影の表現、画像上なぜそのような所見を生じるか、病態あるいは損傷一つひとつの機序や分類な



どが記載されている。自分が「ある」と認識した所見を適切な言葉で表記できるようになることは、各診療科とのコミュニケーションを実りあるものにしてくれるし、そのような所見を呈した背景を知ること、読影の応用力を上げてくれるだろう。

「100本ノック」の並びの順番は内因、外因の区別なく、重症度緊急度、解剖学的にもランダムである。さまざまな傷病者が次から次にやってくる救急室のありようそのまま、ということなのだろう。

B5・頁 304

2019年2月

定価：本体 4,800 円＋税
[ISBN978-4-260-03628-3]

医学書院 刊